

記念講演 「里山:人と自然の共生の場」 要旨



里山という言葉に正確に対応する英語はない。そういう現象や概念がないためだろう。里山が日本的であるとはどういうことか。日本列島の開発にとって、里山とは何だったかを考えてみたい。人と自然の共生という標語は、日本ではすんなり受け入れられた。しかし、この標語を英語にして欧米人に説明してもなかなか理解が得られない。欧米にはない概念だからである。里山を育て、自然と共生して生きて来た日本人の自然観とは何だったのか、日本人のこころの在り処を考えてみたい。西欧文明に、追いつけ追い越せを100年間で見事に達成した明治以後の日本の発展とは何だったのか。日本人は何を得て、何を失ったか。地球の持続的発展を考えようという今、日本人は世界に何を訴えるか。

里山の荒廃といわれる現実を直視し、生物多様性の持続的利用のみちを探りたい。

プロフィール 岩槻邦男氏

1934年兵庫県生まれ。京都大学理学部植物学科卒、同大学院修士および博士課程修了。京都大学助手、助教授、教授を経て、東京大学理学部教授および同附属植物園長、立教大学教授、放送大学教授や日本植物学会会長、国際植物園連合会長等を歴任。現在、兵庫県立人と自然の博物館館長、東京大学名誉教授、生物多様性 JAPAN 代表。

1994年に「植物の多様性の解析およびその滅失に関する保全生物学的研究」により、日本学士院エジンバラ公賞受賞。2007年に文化功労者として顕彰された。

日本の植物分類学を世界の第一線に押し上げた植物分類学者。分子系統学的研究を推進し、シダ植物、裸子植物の系統関係を世界に先駆けて解明した。また、中国西南部から東南アジア全域にわたる植物相の調査・研究のために多くのプロジェクトを立案・実施し、日本と現地の研究者が一体となつての植物多様性研究の発展に貢献。

生物多様性の視点から生物種の絶滅や地球環境の問題を社会に訴えてもいる。在野の植物研究者と協力して日本の植物レッドデータブックの作成を行うほかに、数多くの普及書・専門書の出版及び講演等を通して、一般の人々から専門家に至るまで、生物多様性の保全に対する知的好奇心を刺激し続けている。

著書・共著多数。日本絶滅危惧植物(1990 海鳴社)、多様性の生物学(1993 岩波書店)、植物からの警告・生物多様性の自然史(1994 日本放送出版協会)、文明が育てた植物たち(1997 東京大学出版会)、温暖化に追われる生き物たち(堂本暁子共編著 1997 築地書館)、生命系・生物多様性の新しい考え(1999 岩波書店)、進化・宇宙のはじまりから人の繁栄まで(2000 研成社)、多様性からみた生物学(2002 裳華房)、日本の植物園(2004 東京大学出版会)、温暖化と生物多様性(堂本暁子共編著 2008 築地書館)など。

里山シンポジウム記念講演

「里山：人と自然の共生の場」

岩槻 邦男

■はじめに

ご紹介、ありがとうございます。岩槻です。里山をテーマに話をするようにとお招きいただきましたが、これまで特に里山に特化して研究を行なってきたわけではないので、私の立場から里山の一つのコンセプトについて話をしたいと思います。副題を「人と自然の共生の場」とさせていただきます。

先ほどの知事の話の中にもありましたが、国は SATOYAMA イニシアチブというコンセプトを世界に発信する戦略を立てております。そこで発信しようとしている中身は何なのか。私なりに里山と結び付けて解釈している部分がありますので、そういうことをご紹介しますと思います。

目次の順番で話を進めますが、ここでこれから映し出すパワーポイントは、少しバージョンアップしていますので、お手元の資料とは多少異なることをお断りしておきます。また、私はいつもアドリブで喋りますので、話が前後したり、元に戻ったりすることもあるということをあらかじめご了承ください。

■里山とは何か？

まず、里山とは何なのか。国が発信しようとしている SATOYAMA には、外国に向けてということもありますが、漢字の里山とは少し違う意識が入っているようです。フルキャブのローマ字でかけられる SATOYAMA は、漢字で表記される里山そのものよりは、どちらかというと里地・里山という表現で語られるような場所を指しています。

時々当惑することがあるのですが、私が里山について話しているとき、聴き手は異なった里山をイメージしていることがあります。これはある意味当然で、里山には共通の定義がありません。誰かが、例えば国が里山とはこういうものですよと決めて育ててきたものではありません。また、科学技術の成果として里山をつくっ

これ



たわけでもありません。里山は自然発生的に、人々の日常生活の結果として育てられてきました。

それでは、いつ頃里山はできたのでしょうか。里山の萌芽は、日本列島がどのように開発されてきたかということに関わっています。皆さんは、「日本で最初に自然破壊を行なった人は誰か？」という質問に、どのように答えられますか。私は「最初に自然破壊を行なったのは新石器時代を創ったご先祖様だ」と答えます。ご先祖様は鬱蒼と茂っていた森林をわずかではあります伐開して、そこで人為的に単一作物をつくりました。

これは明らかに自然破壊です。しかし、それを自然破壊とおっしゃらない人たちもいます。なぜそのような矛盾が起こるのでしょうか。それは、「自然破壊は即ち悪である」という考え方が浸透しているからだと思うのです。新石器時代のご先祖様の行動は、「何も悪いことではないのだから自然破壊ではない」ということになります。これからの私の話の中には、こうした自然破壊かそうでないかの話がしばしば出てきます。

里山という言葉については知事の丁寧な説明が先程ありましたが、日本で里山と言えるような状況がいつ頃からつくられていたかということについては、服部保教授(兵庫県立人と自然の博物館部長・兵庫県立大学教授)が万葉集などの古典を詳しく調べて、少なくとも万葉の時代に

は既に奥山の認識が日本人にはあり、人里や里山も既に認識されていたと言っております。

万葉集には防人の歌なども含まれていますから、奈良に住む貴族たちの周囲だけでなく、日本列島全体に奥山、里山、人里というゾーンができはじめていたと考えられるわけです。それらがまとまって意識されはじめたのが室町時代で、はっきりと認識されるようになったのが江戸時代ということになるのかもしれませんが、それは日本人が認識したということであって、里山の成立は万葉の時代にまで遡ることができます。

その里山とはいったい何か。日本列島は見事に奥山、里山、人里にゾーニングされています。新石器時代から開発が始まって、農作物をつくって資源の収益を高めるといふ土地利用がされてきました。日本列島の場合、地形が厳しいことがあって、奥山はあまり開発されませんでした。正確な計算は難しいのですが、国土全体の20%ほどの谷地や猫の額ほどの平地などを開発し、農地化することによって、日本人は食糧資源を支える仕組みをつくってきたわけです。

初めはアワやヒエ、そのうちにコメをつくるようになりました。しかし、それだけでは生活に必要な資源が不足します。まず不足するのはエネルギー資源の薪炭材です。それをバックヤードで採取するようになって、里山というゾーンがつくられてきました。薪炭材を確保するために、焼畑と同じように10年から20年のサイクルで木を切るということをやってきたわけです。それによって日本列島には非常にきれいな二次林が発達しました。

私はここまでの話の中で、生物多様性という言葉を意識的に避けてきましたが、二次林が発達してきますと、いのちの賑わいが豊かな里山が形成されました。木の芽やキノコ類などやそ

生産されるものに必要な補助資源として、さまざまないのちの賑わいを活用してきたのが里山というゾーンです。それによって、奥山、里山、人里というゾーニングができ上がりましたが、これは人々の生活を通じてできたものなのです。

■里山と呼ぶゾーン

ユネスコという、皆さんの中には世界遺産を思い出す人が多いと思いますが、世界自然遺産の保全で採用されているゾーニングは、1960年代に地域を保全するために世界の最高の研究者たちが集まって考えだされたプログラムのシステムを拡大転用したものです。

このシステムでは、まず完全に保全して人手を加えないコアエリア(核心理域)というものがああり、その外側に生活・居住・交流地域としてのトランジットエリアを配置し、それらの間にきっちりとバッファゾーン(緩衝地帯)を設けるべきだとされております。それが世界自然遺産の保全のために展開されているのです。この手法がいまでは保全地域設定の決定版になっていますから、日本の国立公園でもこうしたアイデアをどのように導入するかが、議論されることがあります。

そこでもう一度日本列島のゾーニングというものを考えてみますと、コアエリアに相当するのが奥山です。人里は、人が住んで生活しているので田園地帯などはトランジットエリアということになります。その間に里山というバッファゾーンがしっかりでき上がっているわけです。

里山というのは、日本固有の景観かということ、そうでもありません。景観だけなら似たような風景は世界各地にあります。薪炭材を裏山からとってくるとか、いろいろ身近な補助的な資源を活用するということは、世界のあちこちで行なわれてきたとしても、それは不思議なことではありません。

中国の福建省に里山の専門家たちで行った時のことです。まさにそこには里山景観が存在していました。部落があって、福建省では竹を利用することが多いので、裏山にはやや広めの竹林がありました。このバックヤードの二次林が発達して奥山につながっていくという構成ですから、完全に里山の景色です。中国だけでなく東南アジアでも、こうした景色はあちこちで見られます。しかし、国土全体での広がりで見ますと、里山のように見える景色は点在して

1) 里山とは何だろう

里山は自発的につくられて来、多様な内容を含む

里山 普遍的な定義は困難

薪炭材などのために利用し、二次林となっている場所と見なせば、列島の20%強の面積を占める

ここには原始自然のすがたはない:

里山の自然を護る?

里地里山という区分 みどりと自然

里山の景観そのものは中国などでも

見られるが、人里、里山、奥山

という日本列島のゾーニングは

日本に特異な景観

このゾーニングは人々の生活の

中から生まれた!



こに棲む小動物を補助的な資源として活用できましたし、薪炭材の確保にとどまらず、人里で

も、日本列島のように連続してバッファゾーンとして機能してはいないのです。

最近、そうしたことを英文で紹介したら、ある有名な研究者に「お前の考え方は、保全システムを拡大解釈しすぎだ」と言われてしまいました。確かに日本の里山は、現代の保全システムにきっちり当てはまるようにデザインされたものではありません。しかし、日本全体として奥山、里山、人里がしっかりゾーニングされてきたことは、まぎれもない事実なのです。(もっとも、このような批判は、里山というゾーンが外国人には正しく認識されておらず、里地里山というみどりの領域全体を里山と読み違えている西欧人にありがちな誤解に基づいていません。)

■里山の役割と価値

里山というバッファゾーンが形成されることで、何が起こったのでしょうか。江戸時代まで日本では大型哺乳類が一種類も絶滅していないのです。それは、奥山というところが野生動物にとって天国であったからです。奥山で野生動物は楽しく生活できました。

現在は違います。昨年は、ツキノワグマが5千頭以上射殺されました。なぜ日本列島で野生動物との共生ができなくなったのでしょうか。いろいろな理由があるのですが、はっきりしている理由の一つに、1960年代のエネルギー革命以降、里山の放棄が始まったことがあります。日本列島で放って置かれる里山がどんどん増えているのです。

2) 日本列島の開発

新石器時代のはじまり

鬱閉されていた森林を開発し、単一作物を栽培した
自然破壊 効率の良い資源の安定供給

弥生時代、万葉時代

日本人の自然への畏敬は奥山を保全するかたちで護られてきた。このことは、開発した人里に氏神を祀り、鎮守の社を維持したことで象徴される。

氏神：破壊された村落に 氏族の生活を鎮守

鎮守の社：奥山の依り代＝八百万の神の住まい

室町時代、江戸時代

列島のゾーニングがほぼ確立

明治維新以後、至近過去に何が起こったか？

農村は、しばしば過疎地と表現されます。農村人口は江戸時代とあまり変わっていないのですが、典型的に高齢化が現れていて、限界集落といわれる地域が増えています。そうすると、人が里山にほとんど出入りしない状態が続き、バッファゾーンは荒れてきます。今は奥山にす

んでいる野生動物たちには、奥山と里山の区別ができない状況になっているのです。昔も奥山から出てくる動物は時々いましたが、屈強な若者が里山で仕事をしていますから、それを恐れてすぐに奥山に引っ込んでいました。人間と野生動物は仲良く共存していたわけです。

人里を見てみましょう。私の子供の頃は、田舎の私の家にも柿の木がありました。柿が熟せば、それらを片端から食べ尽くしたものでした。母は、「最後の三つは神様のものだから残しておきなさい」と言っていました。

しかし、田舎でも最近柿の実が秋の終わりまで木に残っています。里山まで下りてきたクマが人里を覗くと美味しそうなものがある。最初は美味しいかどうかかわからないでしょうが、食べてみると美味しいので、やがてしばしば人里にやってくるようになります。ブナの実やドングリよりも柿のほうがクマは確かに好きなようです。そうすると時々お年寄りと鉢合わせしてしまいます。若者でしたらクマも逃げるかもしれないませんが、これなら大丈夫とゴインとやってしまう。それで大騒ぎになって射殺されてしまうわけです。それだけが理由ではないのですが、とうとう5千頭が殺されてしまいました。里山というのはそのようにバッファゾーンとして機能していたのですが、今では機能しなくなっているのです。

こうしたゾーニングが日本列島ではきっちり行なわれたのに、なぜ海外では行なわれなかったのでしょうか。もう少し私の独断で考えてみます。

今でも里山がきっちり護られている事例があります。この写真は、池田炭(菊炭)という茶道などに使われる高級な炭を生産している里山です。8年周期でクヌギ林が伐採され、きれいな日本古来の里山風景が維持されています。炭の生産量だけでは、北海道や東北地方の方が多いので、必ずしも炭の生産で特に目立つ地域というわけではありません。

他の地域との決定的な違いは、ここは炭焼きをする人やそれを支えるボランティアの人たちが里山景観を護ろうとしているエリアだということです。普通に炭焼きをやっている地域は、炭を焼く人と木を伐採する人との分業化が進んでいます。木を専門に切る人は、効率よく伐開するために木を切りつくしては放置し、他へ移ってまた木を切ります。今は里山の景観を維持するような周期的な木の切り方は、普通やられていないようなのです。

そういうところは、既に持続的な里山の利用

ではなくなっています。炭焼きと里山の維持が必ずしも一致していないことが多い中で、この黒川地区では、里山を大切にしようというボランティアグループが、私たちが子供の頃に行っていたような里山での活動を常日ごろ行なっていて、炭を焼く人も8年周期で木を切っています。自然遺産、文化遺産を維持するような形で経営されている里山が今でも実際にあるのです。

こうした里山の維持の仕方は、東北地方から西表島のある琉球列島を含めて、日本列島全土で同じような形で昔から進められてきました。鹿児島県の生活と青森県の生活では植生も違いますし、そこで利用するものも異なるので、必ずしも同じではありません。ですから、ひと言で里山と表現しても地域性もありますし、地形の違いやライフスタイルの違いもあります。里山という大きな括りで話もできますが、宮城県の人と里山について語るときと、熊本県の人とでは微妙にニュアンスの違う里山論を語ることになるのです。結局、「人々が生活の中から作りあげてきたのが里山だ！」ということに帰納するわけです。

■里山 の 概念

SATOYAMA イニシアチブを国際的に発信するためには、里山のコンセプトを整理する必要があります。まず、日本全体に通じている里山 の 概念を考えてみたいわけです。そこで副題に「人と自然との共生」という言葉を使わせてもらいました。このフレーズは最近普通に使われますが、1990年に大阪で開催された「花と緑の博覧会」のシンボルタームとして使われたことがきっかけで全国に広がったようです。

里山という言葉は江戸時代には既にありましたが、ここまで広がるようになったのは、四手井綱英先生が林学者の立場で紹介されたり、写真家の今森氏などが使うようになった最近のことです。里山の場合、荒れて使われなくなって注目され、里山という言葉が必要になったようです。「人と自然の共生」という言葉にも同じようなことが言えます。

「人と自然の共生」は、日本人には非常にわかりやすい表現です。日本人に「人と自然の共生」と言っても、それって何という反応はまずありません。誰もがすんなりと理解して、大切な考え方だと言います。

大阪の花と緑の博覧会を継承した財団が「コスモス国際賞」という賞をつくりました。国際賞ですからいろいろな業績を顕彰するのですが、

その一つに花の博覧会のシンボルタームであった「人と自然の共生」への貢献があり、このタームを英語で説明することが必要になりました。

英語で説明するとなるとこれがなかなか難しいのです。いろいろな企業が環境関連の報告をつくる際に、このタームを英語で表現することにトライしましたが、こんな例にもしばしば出合ったことがあります。共生という言葉のを和英辞典で引くと、生物学用語の共生、symbiosisという言葉が出てきます。そこで、symbiosis between mankind and nature という言い方をつくったのです。symbiosisには双利共生というどちらも利得がある共生、片一方だけが得をする片利共生、更に片一方が完全におんぶする寄生という現象の全てが広義には含まれているのです。私は、皮肉っぽく「そうですね。人は完全に自然に寄生していますからね」などと言って嫌がられることもあります。living together や living friendly といった和製英語で表現をする人もいます。しかし、どれも外国人にはピンとこないようですし、日本語の共生の意味を伝える言葉でもありません。

そこで、英国人に時間をかけて説明し、その助言でできたのが harmonious coexistence between nature and mankind という言葉です。コスモス国際賞のパンフレットにはこの言葉が使われていますし、他にも広がっているようです。しかし、この英語はもう一度日本語に訳しなおすと「人と自然の調和ある共存」ということになるのだと思います。「人と自然の調和ある共存」と「人と自然の共生」という二つの言葉。比べますと、日本人が「人と自然の共生」で感じるインパクトが「人と自然の調和ある共存」にはありません。心に迫るインパクトのある表現が英語ではできないのです。

何故できないのかを考えてみますと、私たちは、nature という言葉を普通は自然と訳しますね。私は、これが本当に正しい訳なのか少々心配になっています。英語の日本語訳の中には、正しいとは言えないものがいくつもあります。例えば、evolution を「進化」と訳しているのは明らかに間違いです。evolution の正しい訳は「展開」です。「松井秀樹の進化」といってメディアが「進化」という語を使ったりしますが、生物学者から見れば、evolutionには退化、単純化も含まれるのです。ですから、「進化」を evolution と読めば、松井秀樹選手は退化、単純化しているということにもなります。神とGOD、これもずいぶん違いますが、これは後で説明します。教育と educationなどは、間違いの典型

的な例とっていますが、そういう話をしていると時間が足りなくなるので、このくらいにしておきます。

日本語の自然という言葉は、もともと老子の自然(じねん)から出てきました。この自然(じねん)とは、人手が全く加わらない状態のことを指します。ですから、「里山の自然を護る」という言葉は少し妙な感じがします。字引の定義から言えば間違っています。私も使いますが、二次的自然という言い方がありますが、実際には二次的自然はありえないのです。そのあたりが、「自然破壊は悪」というのは短絡視しすぎている、という話につながってくるわけです。

こうして考えると、日本人の自然観というものは、欧米の nature とはずいぶん違いますね。荒っぽい説明になりますが、nature は、wild という言葉に通じますから、西洋ではデーモン(悪魔)が住んでいる場所のことです。人間の文明がそこを制覇し、有用資源を活用するのは西洋では善なのです。決して悪ではない。

日本人は自然をどのように見てきたのか…、それを非常に単純に説明すると次のようになります。日本の自然はもともと非常に豊かで、日本人はその恵みに常に感謝して生きてきました。しかし、一方で自然は災害をもたらすことがあります。日本列島も災害は多いですね。災害が多い現実。これは寺田寅彦などが既に指摘していることですが、日本人にはそれに対する畏怖の念が常にあると、自然の恵みに感謝すると同時に、災害に対する畏怖の念を持ち続けているわけです。それが自然即ち神であるという観念につながっているのです。

八百万(やおよろず)というのは無限のことであり、無限というのは自然以外にないわけです。どんなに説明しても八百万の神というのは自然そのものなのです。西洋も今は一神教の文化になっていますが、ローマの時代までは多神教であったということは、皆さんもご存知ですね。でも、多神教といってもギリシアはたった 12 神で、ローマは三十万の神だったといえますから、八百万と比べればまだまだ数が少ない多神教なのです。日本の場合は、単なる多神教ではなく、自然そのものを畏敬してきたわけです。

そのことから派生して、「もったいない」という言葉…、マータイさんが世界に広めようとして有名になりました。それは非常に良いことですが、私が若干危惧いたしますのは、この言葉はもともと「ケチケチ主義の勧め」ではないということです。広辞苑は、勿体(もったい)というのは物の実体、ものの本体そのものことと

解説しています。物体ですから、それは八百万の神がつくったものです。

「もったいない」という語には、3 つの説明が併記されています。一つ目は、神仏などに対して不都合であること。二つ目は、過分のことで恐れ多いこと。三つ目が、ケチケチ主義につながる解釈です。三つ目は、ずっとモダンになって出てきたもので、もともとは「神の与えた物体は非常に貴いものだから大切にしなければいけない」という解釈なのです。わたしの子供の頃、祖母は「もったいない」という言葉を使うときに、必ず「もったいない、もったいない、南無阿弥陀仏…」と拝んでいました。神様に対して「もったいない」ということだったと思うのですが、それが単にケチケチ主義と解釈されると、少し違うのかなと思います。

■里山と信仰と日本人のこころ

日本人は、奥山を開発して、国土の 20%ほどを人が住む人里にしたわけですが、私たちのご先祖様は、八百万の神の持ち物である原生林(=自然)を伐開して、自分たちの生活の場にしてしまったことに対して、たぶん申し訳ないという気持ち、畏怖にもつながる気持ちを持っていたのだと思われます。それは「怖い、罰が当たったらどうしよう」という気持ちです。

そこで何をしたかという、部落の氏(うじ)を護っていただく氏神様(うじがみさま)の社をつくって、そこへ八百万の神に来てもらい、「私たちの部落は少し悪いことをしてしまいました、あまりきついことを言わずに護ってください」とお願いしたわけです。

そのために戸数数戸の小さな村落にもお宮さんをつくりました。そして八百万の神に住んでもらうために、奥山の依代(よりしろ、神の魂の宿るところ)として周囲に森を設け、「鎮守の杜」としたのです。

これは誰かが命じてつくったわけではありません。それでも北海道は別にして、日本の北の端から琉球列島まで、全く同じとは言いませんが、ほぼ同じタイプの杜ができています。これは、日本人と八百万の神、即ち自然との付き合い方の典型的な表現なのだと思います。

明治維新になって、そこに国家が介入します。どういうことが起こったのでしょうか。私は、兵庫県側の奥丹波で生まれ育ったのですが、子供の頃の休みの日には、柴刈りや松の落ち葉かきなどをやっていました。これらは燃料に使いました。松茸狩りや山菜取りにもよく行きました。

今の子供たちは何をしているかといえば、もっぱらテレビゲームで遊んでいますね。ライフスタイルの変化を感じます。

明治維新以後、鎖国の扉を開くと西洋文明が入ってきました。日本人には素晴らしいものに見えたのでしょう。賛美と憧憬の念が強かったと思います。隣の清国は、西洋文明に一方的に侵略されていました。日本もやられるのではな



いかと、恐れおののいたことでしょうか。そこで西洋文明に追いつき追い越せと、教育体系を整えて一所懸命に頑張ったわけです。

確かに追いつき追い越せには成功しました。同志社大学の創立者の新島襄も「教育は100年の計」といっていますが、100年たったら本当に西洋に追いついて、目標が達成されてしまいました。教育でも環境でも、国がいろいろな施策を考へるときに大切なのは、100年先を描いて、何を目標にするかということなのです。それこそが政策だと思うのですが、最近それが見えてこないのが心配です。

それはさておき、西洋に追いつき追い越せは確かに成功しましたが、成功しなかったもの、失ったものもありました。さきほど education を教育と訳したことが間違いであったことに触れましたが、まさにそのところだと思います。

国外で education について、英語で議論したときの話です。私たちは英語を使っている、education ならば教育についての議論なのだと、ついつい日本語で考えます。でも、教育のつもりで議論していると、どこかでずれてくることがあるのです。

教育とは、字引では「教える主体が、教えられる客体を、教える主体の考える方向に導くこと」となっています。一方、education の語源は、引き出すことですから、「教える主体が、教えられる客体の能力を引き出すこと」でなければなりません。どのように能力を引き出すか、そのために教えるわけです。どうも日本では逆

になっているようで、むしろ学習という言葉のほうに education に近い意味があるように思います。

典型的なのは、教育は知育の開発ですから、「勉強しろ！」とよく言います。勉強という言葉は、強いて勉めると書きます。これは「楽しくなくてもやれ！」ということですね。本来学習というのは、嫌々やらせるのではなく、楽しくなければおかしいと思うのですが…。教育する側の主体にはそのほうが好いのかもかもしれませんが、それで「独創性が育たない」と嘆いてもしかたないことです。明治以降の日本は、西洋文明に追いつき追い越せを目標にして、独創性の醸成などを犠牲にしたという言い方ができるのかもしれませんが。

里山に戻ります。日本人の里山に対する観念は、鎮守の杜に典型的に現れていると申しました。明治維新によってその鎮守の杜に何が起こったのか。

お聞きになっていることだと思いますが、それまでの日本は仏教と八百万の神への信仰は、上手に合体していました。本地垂迹といえます。日本人は、伝来の文明を見事に日本風に同化させます。葬式仏教などと揶揄されることもありますが、日本には独特の仏教が根付きました。死者を弔うことが日本の仏教の中心になったことは、そこに日本人の知恵があったと思うのです。お寺には守り神の神社が付く、神社はお寺と一緒に在るという形で、江戸時代まで非常に上手く進んできました。もともとは山岳宗教があったところに仏教の考え方が入って修験道のようなものもでき上がっていたわけです。

このような神仏一体となった考えが日本列島で展開されていたのですが、西洋文明の宗教学というものを勉強してみると、それがインチキということになってしまい、神仏分離が国によって強制されました。国は神道を国教とし、国威高揚のよりどころにしようとしたのです。お寺の坊さんがこれでは食っていけないと神主さんになったという例もあるようですし、修験道はそのとき神道か仏教かどっちについたらよいか迷ったと伝えられています。せっかく歴史的に発展してきたものを国家権力の意思で分離しようとする、混乱が起こるのです。

国の宗教の中心を神社にしようすると、神社の数がとても多すぎます。部落ごとに氏神様をつくったわけですから。そのままでは国で経営できません。それなら一村一社にしようということになって、神社合祀が進められます。いくつもあった鎮守の杜で囲まれていた氏神様で


すが、一つの村で一つということになって、六つも七つもいらなくなってしまいました。

一部の人の中には、鎮守の杜の木を材木として利用するとか、跡地を利用するとか、利権絡みで神社合祀に賛成する人もいたようですが、もちろん南方熊楠のようにこれに正面から反対する人もいました。熊楠の抗議の場合は、応援する人がなく、エキセントリックな熊楠が村役場の人に手を上げて、何日か収監されました。ともあれ今では江戸末期に比べて鎮守の杜は三分の一くらいまで減ってしまいました。

最近、植生学の人たちなどが、「鎮守の杜は日本の潜在植生が護られている場所だから大切に保護しよう」と訴えています。さらに突っ込んで、鎮守の杜は日本人の心が示されているランドスケープ、風景の一つであり、「もったいない」の心などと一緒に見直されるべきだと思っています。

そういうことを踏まえて、「人と自然の共生」を考えてみますと、冒頭で言いましたように、新石器時代のご先祖様たちは、確かに自然破壊を行なったのです。しかし、それは自然と馴染み合いながら、もともとの自然を、自分たちと共生する形の里山をつくり、里山を育てて、生き物が賑わえる場所につくり変えていったということなのです。

ですから、言葉で定義すると自然破壊ですが、その自然破壊は誰もが悪とは言わない形のものです。それを簡単に言い切ってしまうと、環境創成ということになるのでしょうか。私は、自然は保護できるものではないと思っていますか



3) 日本列島のゾーニング
奥山、里山、人里 + 都市域、沿岸地域
日本列島に自然破壊をもたらした人
里山の自然を護ろうという矛盾
里山
兵庫県一庫公園 菊炭
日本の景観としての里山
里山の荒廃 野生生物と人との軋轢
奥山 自然のすがたを残す 八百万の神の住処
八百万は無限を指す すべてのもの=自然は神と見なす

ユネスコ：Biosphere Reserve と
世界自然遺産 (? 知床)
保全地域の策定 Core area, Buffer zone, Transitional area
BR Network 日本のBR
志賀高原、白山、大台・大峰、屋久島

ら、自然保護という言葉はあまり好きではないのですが、自然保護という言葉がある時期の日本で非常に有効な働き方をして、自然破壊の概念を訴えることによって極端な破壊から自然が護られるようになったことは評価しています。私も、これまで自然保護と謳われたことに関

わってきています。

しかし、現時点では、自然保護という言葉をもう一度見直す必要があると思っています。新石器時代のご先祖様は、自然保護はやりませんでした。自然保護をやらずに、人と自然が共生できる新しい環境を、時間をかけて創生してきたのです。これから私たちが意識しなければならないのは、正しい環境創成だと思っています。

■里山の未来

そういう視点で里山の未来を考えてみましょう。里山の荒廃は1960年代から始まりました。その頃から、エネルギー革命といわれるように、農村まで化石燃料依存が強まり、私たちのライフスタイルそのものが大きく変わってきたわけですから、里山をそのままの状態に保護することはもはや難しいと思います。里山は二次的な自然ですが、里山の自然保護を行なおうとしても、人手を多用した日本古来の保全の適用はちょっと無理であり、ないものねだりになってしまいます。

もともとそこで生活し、一家を挙げて薪炭材を整えていくといった里山の運用をお金に置き換えて、それに人手を使って保全することを計算すれば、実際に計算したことはないのですが、最近話題の道路予算くらいではとても間に合わないほどの膨大なお金が必要でしょう。それを税金で賄おうとすれば、日本はいつ頃に破綻してしまいます。そういう意味で、国の予算丸抱えでの里山の保護は考えられないわけです。

それでは、どのようにするか。現在起きている里山の荒廃…、この荒廃のもたらす課題からどのように免れるかということがポイントです。

「里山は、ほっておけば自然に戻るでしょう」と、最近では責任のある立場の人でも、そのようなことをおっしゃる方がいるようです。でも、元の自然にはたぶん戻りません。元とは変形した姿で安定した状態に落ち着くことは確かですが、それはたぶん何十年、あるいは百年以上の時間をかけて移行するという事です。その過程がどういうことかということ、毎年クマを五千頭以上殺さなければならない事態になるのかもしれない。この会場にいる若い人でもこれから百年以上生きる人は、ほとんどいない。安定した状態に落ち着くのを見届けられる人は、誰もいないと思います。そうすると今生きている私たちは、生涯里山の荒廃に付き合っていかなければなりません。しかし、今、このような

テーマに対する明快な回答はありません。

里山の保全をテーマとして考えるとき、しばしば里山というものを単一の方法で救おうという議論に短絡してしまう危険があります。里山の内容は極めて多様です。多様な里山には、それぞれの里山に応じたさまざまな対応の仕方があるはずで、一律に「里山をこうしましょう」とはなかなか言い難いことです。

具体的に例示しますと、一つは、先ほど紹介した炭焼きが現在も行なわれている里山保全です。ここでは、1960年以前の里山の状態が今でもきれいに演出されていて、実際の産業も同じように演出されています。もちろん産業を支える活動をしているボランティアの人たちと一緒に作り上げているのですが、そのような形…、文化遺産か自然遺産かわかりませんが、歴史的に維持されてきた里山はこういうものだったという例が、いくつかは欲しいと思います。

都市周辺の里地・里山に関しては、今もボランティアの活動の場、みどり溢れるいのちの賑わいの場所として、維持されているのが現状だと思います。そこで、それぞれの里地・里山に応じて、それらをこれからどのように維持していくのか、行政がそれにどう関与していくのか、もともと里地・里山は人々が生活の中でつくってきたわけですから、これからの人々の生活の中でそれをどう活かしていくのか、行政だけがやるのではなく、住民が自分たちのものという意識でどう護っていくか、ということをデザインしていくことがますます重要になると思います。

しかし、現在本当に問題なのは、中山間地域の里山です。こうした二次林が広がっている地域を仮に里山と定義すると、これらは日本列島全体の20%強の面積になります。そこでは高齢化が進み、多くがもはや村としては成り立たない限界集落と呼ばれる状況ですから、そんなところで生活しながら維持しようとしてもできない場所もあります。

そうなりますと、ここは上手に安定した状態に移行するような形をイメージし、着地点をどこにおいて、その経過をどのように維持管理するか、ということが考えられるべきだと思います。ところが、それに対する国や地方の100年先を考えた取り組みは残念ながら十分にできていません。

兵庫県は多少進んでいて、私に関わったわけではありませんが、緑税(みどりぜい)という税金を一律に課して、まだモデル実験の段階ですが、その税金の大部分を投入して、中山間地帯

のいくつかのタイプの里山で、行政がどこまで関与して、人々の生活の中でどのように維持できるかという施策を実験的に進めています。そういうことが大切で、そういう試行を重ねながら向かうべき方向を定めて、現在の人々と自然の共生を構築していくべきです。

そういう意味で里山と環境保全の問題は、まさに里山にみる日本人のこのころの問題であり、人と自然が共生してきた日本人の自然観、それからライフスタイル、それを表現するものだと思います。

■結び

SATOYAMA イニシアチブで、地球全体にそうした話題を広げていかなければいけないというのは、まさにここまで話してきたような視点だと思います。

つい先日の4月26日のことです。中村先生(千葉県立中央博物館副館長)にも来ていただいたのですが、兵庫県立人と自然の博物館で環境省と合同の SATOYAMA イニシアチブを考えるシンポジウムを開かせていただきました。来週には兵庫県で G8 環境大臣会合が開催されるという時期でした。

SATOYAMA イニシアチブを急速に西欧にまでグローバルに広めようと G8 の環境大臣に説明しても、なかなか理解されないとされます。少しでも理解してもらえそうなアジアの人から理解を得て、地球全体に広げていく戦略が必要ということになりました。兵庫県での環境大臣会合の後にアジアの5カ国の環境大臣が来日するので、まず大臣からそれらの国の人たちにブリーフィングしてもらうために、勉強してもらいましょうということで話を始めました。環境省も、G8 環境大臣会合や G8 洞爺湖サミットをそのような方向にもっていこうと準備していると聞いています。

少なくとも私たちの唯一の地球のサステナビリティ…、地球そのものを保全していくためには、ここまで述べてきました日本人の持っている自然と共生していくコンセプト、更には精神を地球上に広げていくことが基本的に大切なことであり、それが里山をつくってきた日本人の表現なのだと考えています。

里山というものをそういう視点で、もう一度見直していただいて、環境問題を考えるときには、いつでも Think globally, Act locally がテーマになるのですが、そういう意味で、地球規模で里山というものを考え、それを今回の場

合は千葉でどう活かしていくかということをご検討いただけることを願って、今日は生物多様性にはあまり触れないで、もっぱら里山と日本人の心ということで話をさせていただきました。

どうもありがとうございました。

(文責:栗原裕治)